

〈サロン9条〉 第353回例会（2021.7.27）

テーマ 「原発〈処理水〉の海洋放出は本当に安全なのか？」 参加者 17名

話題提供：高木伸さん（元富士常葉大学教授・理論物理学）

新型コロナウイルス感染拡大のため2カ月ぶりのサロン9条でした。東京五輪と東京感染拡大のニュースが飛び交う中でのサロンでもありました。

高木さんは、東電のホームページの“啓蒙文書”を取り上げ、その説明の矛盾をつきながら、「トリチウム」とは何かの説明を中心に進められました。原子を綿菓子にたとえた話は分かりやすく、レジメには「(なかなか取れん) とれんちうむ」のタイトルがつけられていました。

東電啓蒙書が“如何様にトンデモない”内容なのか次のようにまとめられていました。

* 「トリチウムはすでに身の周りに存在する」について

⇒東電は空気存在量以下なら、トリチウム水を放出しても問題なしとほのめかしている。

そもそも今空気中にあるとされているトリチウムの量は、戦後各国の核実験の後、人工的に作られたもので、元々のものではない。その上、放出すればすでに環境中にある量に積み上がるのだということを知るべきだ。

* 「トリチウムは、大部分が水の状態で存在し、水と同じように体外へ排出され、体内で蓄積・濃縮されないことが確認されています。」について

⇒科学的根拠なし。重さは水の「16倍」で動きにくくひっかかたりすると体外へ排出されない。この特徴を利用してトリチウムを除去する研究もされている。(近畿大学)

* 「トリチウムの人体への影響は、食品中の放射性物質の基準となっている放射性セシウム137と比較すると約1/700です。」について

⇒物理的根拠によると1/30である。

その他多くの矛盾点についての説明のあと、参加者から質問や意見がたくさん出されました。

- 1/700とは何に書いてあるのか？ →東電HPに書かれている。
- 消費者センターから、根拠なしにデータを出すなど警告することはできないのか？
- ラジオで経産省がトリチウム除去技術を募集していたことがある。
- 近畿大学の研究はその後どうなっているのか？→試験管レベルでは可能だが、何せ大量の「処理水」なので難しい。それでも今のところ近畿大の研究が一番可能性がある。他にも方法が模索されているが、原爆開発の「マンハッタン計画」並みの費用がかかるので、政府はやる気がない。海にタンカーのような缶に入れて浮かべて半減期まで浮かべるといった案もあったが、東電は「穴があいて漏れたら・・・」と海洋放出に突き進んでいる方向と矛盾することを言っている。
- 海洋放出は生態系に悪影響する。

- カナダの原発がトリチウムを流して影響があった（民間データ）
- これまでも流してきたが、今回は量が全然違う。普通の原発で流している量の40年分。
- トリチウム以外の60種類除いた水を「処理水」、「処理水等」という。
トリチウム以外にも放射性物質が2〜3含まれている。それが何か東電は発表していない。池内氏はストロンチウムなど7割含まれていることが予想されるのでALPS（Advanced Liquid Processing System）にもう一度通すべきだと主張している。
- 韓国も強く非難しているが、何か特別な理由があるのか？ →海流の影響、政治的背景があるようだが、はっきりしない。
- 「国際原子力村」というものがあり、汚染水の海洋放出に甘い要因の一つ。
- メディアは「風評」をよく取り上げる。実害があるのに「風評」を強調するのは許せない。
- 宇宙に目が向けられているが、放射線が人間に悪い影響はないのか？ →かなりあると思う。宇宙船にマウスをいれて実験をしている。長い目で見なければわからないが、人間の進化における影響がどうなのだろう？
- 海洋放出が知らないうちに行われてしまうのではないか。
- 福島だけの問題としてしまわないで、今日のように色々な機会学ぶ必要がある。 など

最後に、高木さんは、「海で薄めれば問題ないと言われることがあるが、絶対薄まることはない。」と強調されました。

専門的なことを分かりやすく話され、「処理水」の海洋放出の危険性がよく分かりました。